

暦の上では春とは言え、まだまだ厳寒の日々ですね。皆さんはお元気でお過ごしでしょうか。僕は3月2日の稽古開始に向けて、台詞との格闘が続く毎日です。

いつの間にか演劇界では、漫画やアニメやゲームといった二次元の作品を、俳優が舞台上で演じて三次元にする「2.5次元」と呼ばれる演し物が注目を集めるようになり、歌舞伎界でも「刀剣乱舞」や「ONE PIECE」、「もののけ姫」といった演目が並ぶようになりました。娯楽性の強い作品を楽しむのも舞台の醍醐味ではありますが、芸術性の高い作品を提示してゆく事も忘れてはなりません。

『Flowering Cherry』の作者、ロバート・ホルトは「アラビアのロレンス」や「ドクトル・ジバゴ」などの映画の脚本家としても知られていますが、舞台劇の作家としても「すべての季節の男」でトニー賞を受賞するなど、素晴らしい舞台作品を数多く世に送り出しています。中でもこの『Flowering Cherry』は、彼の代表作とされています。

この作品の副題を、あえて「夢見るチェリー」としたのは理由があります。チェリーと呼ばれているのは主人公の男の事ですが、『Flowering Cherry』というと、どうしても植物のチェリーの木に花が咲くというイメージが強すぎるからです。一旦そう思い込んでしまうと、劇のクライマックスでもとても大きな支障をきたす恐れがあります。翻訳者の意見では『Flowering Cherry』には、チェリーという男が、いつも「ひと花咲かすぞ。」と言っているイメージがあるそうです。ならば「夢見るチェリー」の方が誤解がないだろうと思いいこの副題に致しました。

新年度が始まったばかりのお忙しい時期とは存じますが是非劇場まで足をお運びください。感謝 せー 巖、健